

### (3) 博多遺跡群出土の銭貨鋳型について

下関市立大学 櫻木 晋一

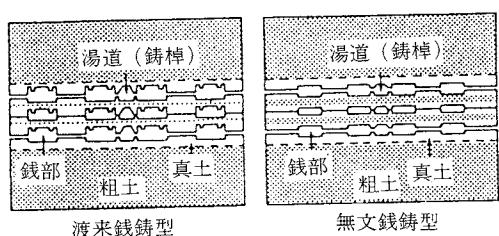
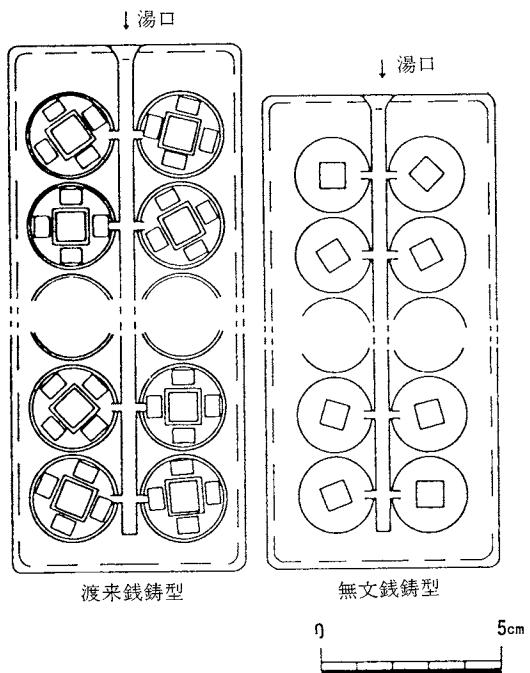
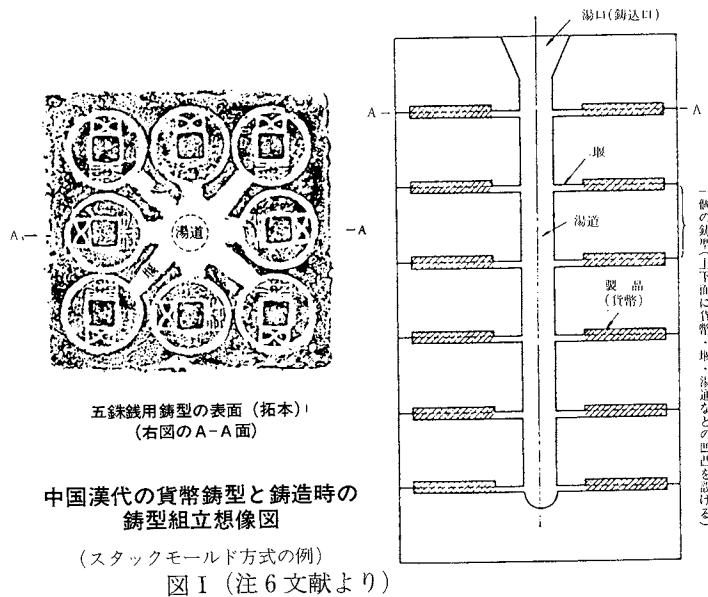
近年、全国各地で中・近世の遺跡に対する調査が実施されるようになり、出土銭貨資料も増加してきた。従来はあまり重視されなかった出土銭貨であるが、経済史の分野では銭貨の流通問題、民俗学の分野では銭貨のもつ呪術性やその埋納行為の意味、自然科学の分野ではその金属組成の解析など、近年ではさまざまな学問分野から注目される遺物となってきている。また、出土銭貨研究会が全国的組織として結成されたことにより<sup>1</sup>、その会誌を通じて情報の入手も比較的容易になり、出土銭貨研究は加速度的に進展してきた。埋蔵文化財担当者にとっては、遺跡からの銭貨の出土頻度が高く、その報告のために出土銭貨そのものの判読には興味がもたれている。しかし、銭貨そのものの研究とは裏腹に、銭貨の生産という点に関しては、その解明のための資料が少ないということもあり、今日まではほとんど研究対象となってこなかった。ようやくここ数年、鋳造遺跡の発掘調査例も増加し、堺市において大量の銭貨の鋳型が発掘されるにいたり<sup>2</sup>、にわかに中世期のわが国における銭貨鋳造の問題が、全国的に注目されるようになってきた。

銭貨は、同一形状で均質のものを大量に鋳造する目的をもっているため、一枚の鋳型から複数の銭貨が生産できるように、つまり大量生産が最初から考えられている。近世の寛永通寶生産のように鋳物砂を用いる方法もあるが、中世以前については、耐火性があり反復使用できる鉄范・銅范・石范・土范<sup>3</sup>など、さまざまな材質の鋳型による生産が知られている。このうち粘土板に鋳型を刻んだ土范が初源的で、かつ最も容易に造れる范型と考えられており、中世における模鋳銭の生産は、今までの鋳型の出土例からみても、この土范で行われていたと考えられている。また、土范による鋳造方法も、二つの方法に大別できる。ひとつは、中国漢代の五銖や貨泉などを鋳造した時に使われたことが判っているスタック・モールド方式である<sup>4</sup>。これは一個の鋳型に数個の銭貨雌型を中央の穴（湯道）から放射状に配置し、同形の鋳型を数枚から十数枚積み重ね穴が貫通した状態にして、上部の湯口から溶けた金属が流れ込むようにした方法である<sup>5</sup>。（図I）もう一つの方法は、鋳型の中央に湯道を設け、その左右に銭貨の雌型を一・二列配置して、金の成る木と俗によばれている「枝銭」が出来あがる方式である。（図II）この二つの方法は、湯の流れる湯道の方向に対して銭面が直角であるか、平行であるかの違いが生じる<sup>6</sup>。

本報告の博多遺跡群第85次調査において、銭貨の鋳型が二片検出されたので、その報告と若干の考察を加えることとする。第85次調査では取瓶・フイゴの羽口・鉄滓・銅滓・鍋の鋳型などが出土しており、鋳造関連遺跡であることは間違いない。出土した銭范の一片は石製鋳型、もう一片は土製鋳型である。現在までのところ知られている中世の土製鋳型の出土例は、京都市平安京左京八条三坊<sup>7</sup>・鎌倉市今小路西遺跡<sup>8</sup>・堺市環濠都市遺跡<sup>9</sup>の3都市であり、博多遺跡群が全国で4都市目となる。石製鋳型については過去にその出土例が知られておらず、わが国初の出土品である。なお、わが国律令政府が鋳造した和同開珎の鋳型は、長門鋳錢司、平城京からの出土例が存在し、土製鋳型である<sup>10</sup>。また、中世遺跡からこれまでに出土した銭范は、すべて土製の「枝銭」方式のものである。素材が石製の鋳型については過去に出土例がなく、非常に貴重な発見であるが、被熱した形跡がないことから、使用されていない可能性も高く、この石范が実際の銭貨生産に結びつくのかどうか、類例の検出を待って慎重に考察を加えなければならない。

第85次調査で出土した二片の鋳型について、観察所見を以下に述べる。

石製鋳型（図III）の色調は暗灰色である。材質はシルト岩で、きめが細かく緻密である。表裏・側面に無数の細かい擦痕があり、湯道の中にも縦方向に擦痕が認められる。表面観察では、火熱をうけ



図II (注9文献より)

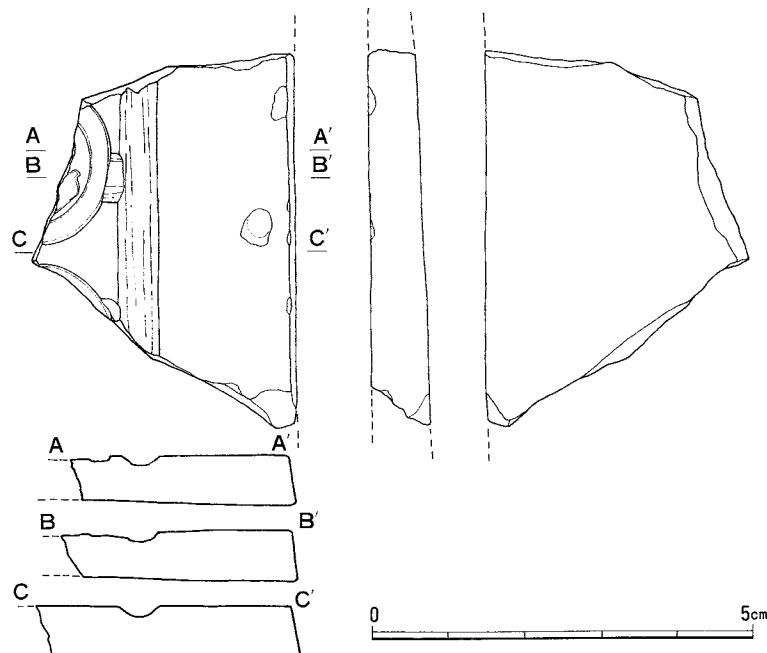
順位	錢種	枚数	%	備考
1位	●皇宋通寶	265,807	11.7	北宋1039年初鑄
2位	●元豐通寶	251,855	11.1	北宋1078年初鑄
3位	●熙寧元寶	200,557	8.8	北宋1068年初鑄
4位	●元祐通寶	182,879	8.0	北宋1086年初鑄
5位	●開元通寶	170,690	7.5	唐 621年初鑄
6位	●永樂通寶	113,882	5.0	明 1408年初鑄
7位	●天聖元寶	103,966	4.6	北宋1023年初鑄
8位	●紹聖元寶	87,441	3.8	北宋1094年初鑄
9位	●政和通寶	83,083	3.6	北宋1111年初鑄
10位	●聖宋元寶	80,740	3.5	北宋1101年初鑄
11位	●祥符元寶	49,674	2.2	北宋1008年初鑄
12位	●景德元寶	47,916	2.1	北宋1044年初鑄
13位	●天禧通寶	46,563	2.0	北宋1017年初鑄
14位	●洪武通寶	46,071	2.0	明 1368年初鑄
15位	●嘉祐通寶	44,530	2.0	北宋1056年初鑄
16位	●祥符通寶	38,834	1.7	北宋1009年初鑄
17位	●咸平元寶	36,726	1.6	北宋998年初鑄
18位	●治平元寶	35,503	1.6	北宋1064年初鑄
19位	●至道元寶	34,340	1.5	北宋995年初鑄
20位	●元符通寶	31,478	1.4	北宋1098年初鑄
21位	●景祐元寶	29,956	1.3	北宋1034年初鑄
22位	●嘉祐元寶	26,450	1.2	北宋1056年初鑄
23位	●大觀通寶	24,434	1.1	北宋1107年初鑄
24位	●至和元寶	24,073	1.1	北宋1054年初鑄
25位	●淳化元寶	18,528	0.8	北宋 990年初鑄
26位	●太平通寶	18,059	0.8	北宋 976年初鑄
27位	●治平通寶	11,433	0.5	北宋1064年初鑄
28位	●淳熙元寶	10,330	0.5	南宋1174年初鑄
29位	●明道元寶	10,010	0.4	北宋1023年初鑄
30位	●嘉定通寶	7,857	0.3	南宋1208年初鑄
31位	●乾元重寶	7,631	0.3	唐 759年初鑄
32位	●宋通元寶	7,239	0.3	北宋 960年初鑄
33位	●宣和通寶	6,931	0.3	北宋1119年初鑄
34位	●至和通寶	6,597	0.3	北宋1054年初鑄
35位	●慶元通寶	4,339	0.2	南宋1195年初鑄
36位	●紹熙元寶	2,998	0.1	南宋1190年初鑄
37位	●正隆元寶	2,987	0.1	金 1158年初鑄
38位	●宣德通寶	2,970	0.1	明 1433年初鑄
39位	●紹定通寶	2,925	0.1	南宋1228年初鑄
40位	●朝鮮通寶	2,616	0.1	李朝1423年初鑄
40位までの錢種合計枚数		2,180,898	95.7	
40位以下の錢種合計枚数		98,912	4.3	分類不可72,946枚(3.2%)
総合計		2,279,810	100.0	

●出土模鋳錢鋳型に存在する錢種

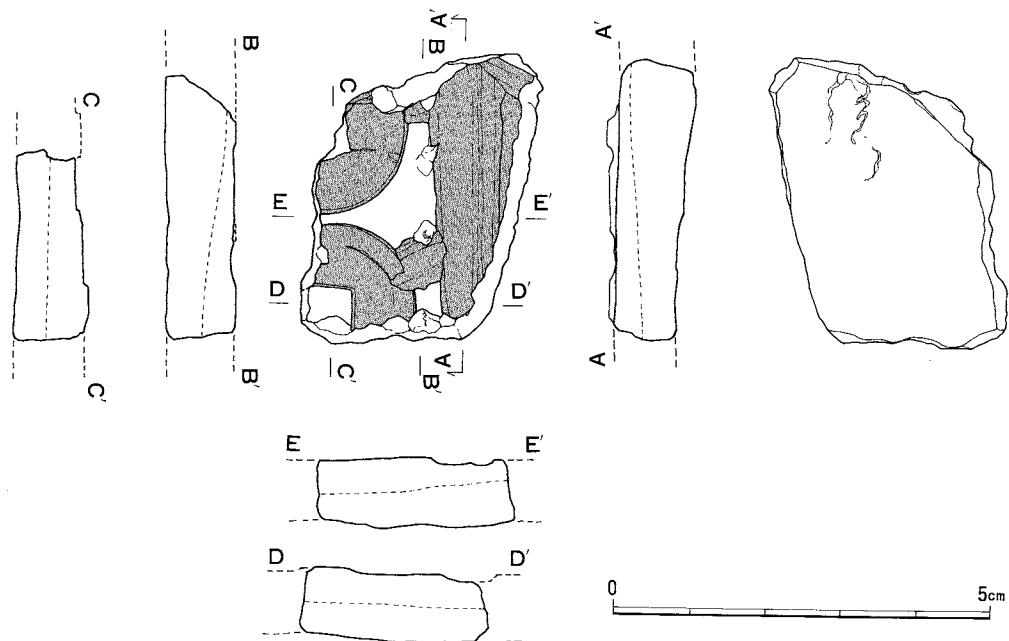
表I 備蓄錢錢種順位と鋳型錢種との関係

(注9文献より)

た形跡は認められない。幅5mm・深さ1.5mmの湯道と、一部ずつではあるが2枚分の銭面、およびそれらを結ぶ幅6mmの堰が刻み込まれている。堰と湯道は直交している。側面から観察すると、厚みが若干変化しており、湯を流し込む上部の方が厚くなっていると考えられる。また、通常は湯道の両側に銭面が存在するのだが、鋳型の外縁部分は原型のまま残存していることから、湯道の片側だけにしか銭面が存在しないことは明らかで、特殊な鋳型の例であると考えられる。U字形の湯道の内側に銭貨を配置したのであろうか。残存部分から銭貨の外径を復元すると、約2.4cmとなる。これは通常の一文銭の標準サイズである。2.9mmの輪（銭貨の外側の段）の部分を確認できることから、文字の確認はでき



図III 石製鋳型 (1/1)



図IV 土製鋳型 (1/1)

ないが、何らかの文字が刻んであった銭貨の鋳型であると考えることができる<sup>11</sup>。A区4面の魚骨などを伴うゴミ穴と考えられる1163号遺構から出土しており、時期は層位から15世紀～16世紀初頭と考えられる。

土製鋳型（図IV）の色調は、粗土の部分が茶色・暗茶色で、真土部分は暗灰色である。粗土には砂粒が混じっており、裏面にはスサが混入していることを確認できる。焼成は土師質で軟質である。表面は全面荒れ気味で、銭銘の確認はできない。銭面も緩やかな凹凸をもち、平坦ではない。洗浄作業時に、軟質のため真土の一部が剥離してしまったためであると思われる。湯道・堰・銭面は被熱していることを確認でき、この鋳型は実際に使用されたものであると考えられる。幅7mm・深さ1mmの堰が湯道に対して斜め方向に切ってあり、鋳型の上下を確認できる。上部の方が湯道も1cm程あり広くなっている。不完全ながら2枚分の銭面を確認でき、その残存部分で銭貨の外径を復元すると、約2.4cmとなる。銭銘は確認できないが、輪はわずかに認められ、郭は認められない。標準的な大きさであることと輪を有することから無文銭ではないと推定できる。流通銭を母銭として踏み返すことによって、輪や郭がはっきりしなくなった可能性が考えられる。この鋳型はD・F区の4面で検出されており、時期は石范と同様に層位から15世紀～16世紀初頭と考えられる。

ここで、簡単に他の3都市から出土している中世の銭范についてまとめてみることにする。

京都市の平安京左京八条三坊では3地点から、銭貨の鋳型が見つかっている。最初に発見されたのは、八条三坊七町の14世紀中葉の遺構で1点のみであった。これは両面に銭面があり、その片面に銭銘があり、「□和□寶」と読める。反対の面には銭銘がない<sup>12</sup>。八条三坊六町では、14世紀中葉の別々の柱穴から1点ずつ、計2点出土している。1枚は片面のみに判読できないが銭銘を有し、薄い。湯道と堰が直交している。他の1枚も、片面のみに銭銘のない銭面を有する。最近出土した八条三坊三町の銭范はまとめた出土例である。13世紀後半に属し、模鋳銭の鋳型では鎌倉市・堺市のいずれのものよりも古い時期のものである。銭面が両面にあるものと、片面にしかないものの二タイプに大別できる。両面に銭面を有するものが5mm程度と薄く、片面のみのものが9mm以上と厚いことから、片面に銭面を有するもの間に、両面に銭面を有するものを挟んで、銭貨の鋳造が行われていたと考えられている。「政和通寶」「元□通寶」「紹□元寶」などの銭銘を確認できることから、模鋳された銭貨はすべて中国銭であったと考えられている。銭范の出土量から、小規模な生産であったと推定されている。以上のように、八条三坊では3カ所で銭范が出土しているが、この区域が工人集団の居住区であったことが諸史料から確認されており、鏡や仏具の生産者たちが何らかの特別な契機に銭貨を鋳造したものと考えられている<sup>13</sup>。

鎌倉市の今小路西遺跡では、総量約7.5kgのかなり細片化した銭范が、模鋳銭鋳造失敗品とともに、井戸から出土している。時期は15世紀初頭に属する。銭范は縁が丸く断面が山形をなす、片面のみ銭面がある1cm以上の厚みをもつものが一つのタイプである。もう一つは、縁が直線で断面が板状のもので、1cm内外の厚みの片面にのみ銭面をもつものと、5mmほどの薄さで両面に銭面をもつものとに大別される。湯道についてはわずかながら出土しているが、報告書からは細片のため湯道と堰の報告については、読み取ることが出来なかった。判読できた銭銘は、「開元通寶」・「□元重□」・「天□□□」・「政□通□」である。この遺跡は、13世紀中ごろから15世紀前半にかけて、鋳造や骨細工に従事した工人達が居住した長谷小路周辺遺跡群の北に隣接しており、これらの工人との関連が考えられている<sup>14</sup>。

堺市の環濠都市遺跡では、SKT78・SKT271<sup>15</sup>・SKT344・SKT364・SKT354・SKT500・SKT628<sup>16</sup>の7カ所から銭范などが出土している。湯道やバリのついた鋳放銭など未製品も出土しており、時期

は16世紀の中頃から後半に属するものである。質・量ともに最も良好な資料である。博多遺跡群出土のものを含めても、時期的に最も新しいものである。堺の鋳型の特徴は、銭銘を有する模鋳銭の銭範の出土もさることながら、ここだけで無文銭の銭範が出土していることである。量的には無文銭タイプの方が多く、全体の85.4%が無文銭タイプであると報告されている<sup>17</sup>。銭銘を有するものは、唐の「開元通寶」と明の「洪武通寶」以外は、すべて北宋錢の「皇宋通寶」や「元豐通寶」などであり、備蓄銭中に多く含まれるものが占めている。(表 I)この銭銘の在り方も、重要な事実を示唆していると考えられる。15世紀以降の備蓄銭に多数含まれるようになる、「永樂通寶」の銭銘を有する鋳型が発見されていないのである。このことは、堺では「永樂通寶」の模鋳銭を鋳造していないと考えるのが自然であり、当時畿内では「永樂通寶」があまり流通していなかったことの反映であると、筆者は推定している。「東の永樂、西のビタ」といわれた流通の実態を、これらの鋳型の銭銘は物語っていると考えられる。16世紀になると無文銭が流通銭貨に混入してくることは、撰銭令の内容や出土銭貨の状況からも明らかであり、堺環濠都市遺跡で無文銭の鋳型が出現したというのは、このことを象徴的に示していると考えられる。また、商人居住区から鋳型が出土しているということも、特徴的なことである。職人の出張生産、つまり、出吹が想定されている。時期的に古い他の遺跡のように、工人が他の鋳物製品と一緒に銭貨を製作するのではない姿が浮かび上がってくる。生産形態の復元も重要な問題である。

ここで、銭貨模鋳の特徴や問題点をまとめて考えてみることにする。

博多遺跡群内の他の調査でも、本調査区と近接している櫛田神社東側の第97次調査で、13世紀の銅器工房群が発掘され、15基の銅器の鋳造工房が確認されている。鋳型・取瓶・坩堝・銅滓などが出土していることから、職人集団の居住区であると考えられている<sup>18</sup>。博多遺跡群内では、第61次<sup>19</sup>・第63次<sup>20</sup>・第72次<sup>21</sup>・第80次調査<sup>22</sup>などでも、鋳型・坩堝・フイゴなどの鋳造関連遺物が出土しており、町内の至るところで鋳物生産が行われていたことは明らかである。銭範自体は15世紀～16世紀初頭に位置付けられ、他の調査区とは時期的な差が存在するものもあり、これらが直接結びつけられるかどうかは不明であるが、中世においてこの付近に工人達が居住していたことは間違いない。博多遺跡群の場合、工人達が他の鋳物と一緒に銭貨を模鋳していたということでは、工人居住区で生産されていた京都・鎌倉型であると考えられる。京都の例からも明らかなように、13世紀には銭貨の模鋳行為が行われ、徳川幕府によって銭貨が発行されるまでの間、日本各地で模鋳銭がつくられていたと考えられる。その生産主体は工人や商人、戦国大名などさまざまであるが、時期によって変化していると考えられる。京都・鎌倉・博多においては13世紀から16世紀初頭にかけて、模造行為が工人達の余技として彼らの手によって簡単に行われていたことを推測できるが、16世紀中期になると、堺の出土例が商人居住区からであることから、商人達がかなり大量の銭貨を鋳造させていたのではないかという、これまでとは異なる生産形態が見えてくる。無文銭という銭銘を有しないものが大量に出現するところにも、時代の変化・民衆の意識の変化を読み取ることができる。流通銭貨量の絶対量不足という事態に対して、商人達が銭貨生産によって対応したという推測ができる。

技術的な問題点を一つ指摘しておきたい。土製鋳型はわれわれが想像しているほど、繰り返しの使用には耐えられないのではないかということである。鋳上がった銭貨を取り出す際に鋳型が破損し再使用できなくなる可能性が高いのではないかだろうか。このことは、各地で出土している鋳型が細片化していることからも想像できる。注5の実験のように、従来言われている方法では実際に鋳造出来ない可能性もあり、「枝銭」を造る方法にしても湯道は小さく、溶けた金属が容易に流れ込むとは考えにくく、スタッカ・モールド法の実験と同様固形の金属を湯口に詰め、鋳型ごと加熱する方法をとった

可能性も十分考慮しなければならない。この検証のためには、片面のみに銭面を有する厚手の鋳型が、外側から火熱をうけているかどうかを観察すればよいが、残念ながら、今まで出土している鋳型の大半は、外側の粘土が剥離しており、最も外側の状態を観察できない。従って、この問題については現在のところ解決の糸口がない。三角縁神獸鏡の製作の復元実験が行なわれ、従来想像されていた方法では鏡面の反りは出来ないことが報道されたが<sup>23</sup>、銭貨についてもどのようにすれば鋳造できるのか、その復元実験を実施することが重要であると考える。まさに、学際研究の必要性を感じられるのである。

東国を中心都市鎌倉、畿内では天皇の居住する京都、勘合貿易の堺および九州の博多と、中世を代表するすべての都市から銭範が出土したことになる。今後、地方都市とでも言うべき場所から銭範が出土することも予測でき、類例の収集に努めなければならない。中世の銭貨鋳造の実態が、この鋳型の出土によって明らかになりつつある。従来は中国製と考えられていた中世の銭貨も、ある程度の量は、国内で鋳造されていた可能性を想定しなければならないのではないだろうか。銭貨の鋳型は、やもすると見過ごしてしまうような目立たないものであり、今後さらに精度の高い発掘調査を期待し、類例の増加を待ちたい。

#### 注

1. 1993年8月1日に、慶應義塾大学鈴木公雄教授を会長として、西宮市立郷土資料館で発足打合会が開かれ、事実上活動を開始した。
2. 1990年代に入り、堺環濠都市遺跡から銭貨の鋳型が出土していることは知られていたが、1991年8月～12月に実施された鳴谷和彦氏担当のSKT78の調査で、大量の銭貨の鋳型が出土した。
3. 範は鋳型の意味。
4. スタック・モールド法は重疊法・疊鑄法と訳されている。(stack=積み重ねる、mold=鋳型)
5. この方法で銭貨が実際に出来上がるかどうかの復元実験が、伊藤博之氏や齊藤努氏らによって行われたが、湯(溶けた金属)を流し込むという方法では全体に湯が廻らず、銭貨は出来ないことが報告されている。圓形の金属を湯口に必要量入れておいて、鋳型の焼成と金属の溶解を同時にを行い、自然冷却した場合に実験は成功して、銭貨が鋳造出来ている。(伊藤博之・齊藤努・大橋一隆・高橋照彦・西谷大「大泉五十の重疊式鋳造技術の復元」『日本文化財科学会』第13回大会研究発表要旨集、1996年)
6. 鋳造技術については、石野享『鋳造 技術の源流と歴史』産業技術センター(1977年)を参照。
7. 山本雅和「平安京左京八条三坊出土の銭鋳型」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第3号(1996年)
8. 『今小路西遺跡』今小路西遺跡発掘調査団(1993年)
9. 鳴谷和彦「堺出土の銭鋳型と中世後期の模鋳銭生産」『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会(1994年)
10. 佐藤興治「銭貨の鋳造について」(『おおいた考古』第2号、1989年)を参照。
11. 現在まで出土している無文銭(銭銘を有しない銭貨)は、銭径がやや小さく、輪や郭(中央の孔の周りの盛り上がり)を持たない平坦な銭貨である。無文銭を製作する時は、原材料が少なくてすみ、なるべく手間のかかるようなことはしないと推定できる。
12. 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所(1982年)
13. 注7が、平安京八条三坊の3カ所すべてについて考察を加えている最新の論考である。
14. 宗臺秀明「中世の模鋳銭と社会」『中世都市研究』第3号(1994年)、同「鎌倉の模鋳銭」『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会(1994年)。
15. 銭範は出土していないが、鋳放銭や銅の湯道部分が出土しているので、これに含めた。
16. 1996年度の調査なので未報告だが、鳴谷和彦氏の御教示による。
17. 注9が鳴谷和彦氏の最新の論考である。他にも、鳴谷和彦「中世の模鋳銭生産 堀出土の銭鋳型を中心に」『考古学ジャーナル』No372ニュースサイエンス社(1994年)などがある。
18. 毎日新聞(福岡版)1996年7月24日記事。
19. 『博多24』福岡市教育委員会(1991年)
20. 『博多31』福岡市教育委員会(1992年)
21. 『博多42』福岡市教育委員会(1994年)
22. 『博多51』福岡市教育委員会(1996年)
23. 北九州鋳金研究会の実験(西日本新聞1996年10月4日、同11月19日付記事)